

混迷のミャンマーから名古屋の大学へ

いつか母国の教壇に立つ

ミャンマーで国軍がクーデターを起こして5年半が過ぎる中、混迷する母国を離れて大学生生活を日本で過ごす女性がいる。東海学園大学教育学部1年のシンテッソーさん(24)だ。同国では子どもたちが満足な教育を受けられない状況が続くが、「日本での学びを、いつか母国の学校で生かしたい」と奮闘している。

(酒井博章)

シンテッソーさんが通うのは、名古屋市天白区の同大名古屋キャンパス。大勢のクラスメイトと共に、日本の学校現場を想定した掲示物を作成する実習に取り組む。日本語の専門用語を扱うことが難しく感じることもあるが、「友だちと一緒に勉強してくれるから、助かります」とほほえむ。



友人らと談笑するミャンマー留學生のシンテッソーさん(左)。名古屋天白区の東海学園大名古屋キャンパスで。

ミャンマーのクーデター 2021年2月1日、国軍がクーデターを起こし、アウンサンスーチーさんら与党「国民民主連盟」(NLD)の幹部を拘束。非常事態を宣言して全権を掌握し、市民の抗議活動を弾圧した。民主派や少数民族の武装勢力が国軍支配に抵抗して内戦状態となり、多数の死者が発生、国連推計で300万人以上の避難民が生じている。

バイトと両立「ここで頑張る」

め、実家に戻って家業の農業を手伝いながら再開を待っていた。しかし2021年、国軍がクーデターを起こして抗議する市民を武力で弾圧、内戦状態となった。「軍事政権に反対するために、学ぶことを放棄した」。キャンパスに戻ることも、退学を決めた。タセ市でも、長引く内戦で子どもたちが授業を受けられない状況に。そこで、知人と一緒に無料で勉強を教えた。子どもと触れ合い、算数や科学の楽しさを伝えるために「教えることの面白さに気付いた」と振り返る。

「教育を本格的に学びたい」との思いが募っていったが、軍事政権下ではかなわぬ夢。悩んでいた時、クーデター後に多くのミャンマーの若者が渡航した日本に目が向いた。家族に相談すると、快く送り出してくれた。24年に来日し、静岡県内の日本語学校で語学力を磨いた。同じような夢を追って来日した同郷の友人と学べる環境を探し、東海学園大を選んだ。現在は週4日のアルバイトをこなして学費や生活費を工面しながら、学業に励んでいる。「思い描いていたキャンパスライフとは少し違うかも」と忙しい日々を苦笑する。

クーデター後、母国では学ばず余裕がなくなっている。安心して学ぶことができないミャンマーの子どもたちの未来のために、「ここで頑張りたい」。いつの日か母国に帰り、教壇に立つことを夢見する。

内戦に大地震「教育環境 危機的」

ミャンマーの教育環境 前と比べて400万人以上は、国軍クーデターとその後の内戦で悪化の一途をたどっている。7月に公表された国連などの調査では、学齢期で学校に通えない子どもの数は約700万人に上るとみられ、およそ10年

同国で学校建設や図書室整備といった教育文化支援活動に取り組む公益団法シヤンティ国際ボランティア会(東京)は、「ミ

同会アジア太平洋東南アジアグループ担当の真屋友希さんによると、内戦で学

校施設などの損傷や教員不足が進み、教育自体の提供

が困難な地域がある。加え

る」と現状を説明した。

て4千人近い死者を出した25年の大地震で国内経済が疲弊し、多くの家庭が通学費用などを捻出できなくなっているという。

就学率は中学、高校と学

年が上がるほどに下落して

いるといい、「働ける年齢

の子どもの家計を支えるた

め、就学せずに働いてい